

中学・高校の制服に対する意識(第2報)

——親の制服に対する意識の構造——

松阪女短大 ○渡辺澄子 上島雅子 川本栄子

目的：現在、中学・高校で制服を採用しているところは非常に多く、生徒にとって制服はごく当たり前であるとされながら、一方においては服装の自由化についても論じられている。また父兄や一般の人々の間では、制服の是非をめぐる論争もさまざまであり、制服に対する見方や考え方は多様化してきている。中学・高校の制服が現代の衣生活の中でどんな役割を持っているのかを、制服の社会的、身体活動的、経済的、教育的な側面から調査を行い制服に対する意識の構造を把握する。

方法：調査は幼稚園児の父母262名、短大生の父母114名を対象に配票留置法によるアンケート調査を行った。分析方法は前報^{*)}で行った因子分析の結果から得られた個人得点をもとにクラスター分析を行い被調査者を類型化した。さらに生活意識、ライフスタイル、衣服観、制服との接触経験、被調査者の基本属性とのクロス集計を行い検討した。

結果：前報において一般の人々の制服に対する態度項目を分析した結果、意識を構成するおもな要因は①主体性、個性 ②管理上の都合 ③機能性の3つであった。本報ではこれらの要因への反応をもとに被調査者を類型化すると、おもに6つのタイプに分類することができた。すなわち制服に対して好意的な人の中にも4タイプあり、非好意的な人の中にも2タイプあることがわかった。またこれらのタイプは性別、職業の有無、学歴、ライフステージ、生活信条、教育観、衣服観、新聞閲読内容、価値観の違いにより差が認められた。

*) 川本、渡辺、上島；被服心理学研究分科会研究発表会テキスト(1985)